

オオタカはどんな鳥？



オオタカはタカ科ハイタカ属の中型タカ類です。全長約50cm(カラス大)。平地や丘陵地、山地などの森林に生息しますが、森林のみが連続する環境よりも森林と開けた場所が入り混じった環境を好むとされています。肉食性で、他の鳥や小さな哺乳類(ネズミなど)を捕食します。

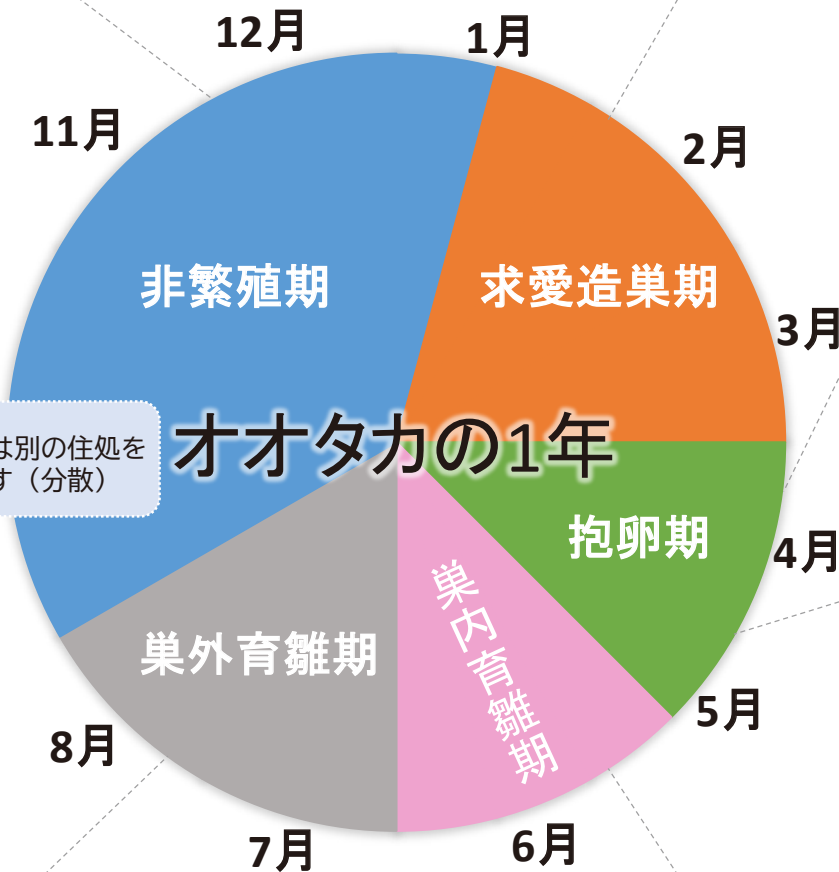
1990年代には絶滅が危惧されていましたが、近年では分布を拡大し、都心でも繁殖が見られるようになりました。



園では8月になると親鳥、幼鳥ともに1度姿を消します。9月にオスと一部の幼鳥が戻り、水浴びをする姿などがしばしば確認されています。



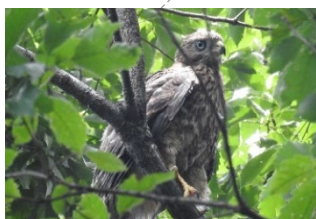
1月から3月にかけて、求愛行動と並行して巣作りします。前年までの巣を使う場合も、新たに巣材を持ってきます。



通常、4月から5月にかけて巣の中心に卵を産み、孵化するまで抱いて温めます。



卵を抱くのは、ほとんどがメス。オスはメスの分のエサも取ってきます。



幼鳥の姿。初めて巣の外へ出た後は段々遠くで過ごすようになり、やがて巣へは戻らなくなります。



産卵から40日程度で孵化。ヒナが大きくなるとメスも狩りに出かけるようになります。

自然教育園でのオオタカの繁殖



自然教育園で初めて繁殖行動が確認されたのは2017年のことです。この年はアカマツに営巣し、2羽のヒナが生まれるもすぐに消失してしまいましたが、以降は毎年成功し、2018年から2022年の5年間で11羽のヒナ(幼鳥)が巣立ちました。

オオタカの繁殖には、営巣できる大きな木のある森と周囲に狩りができる環境が必要です。7年間続けて繁殖行動が行われている自然教育園は、都心においてオオタカが繁殖できる環境を有するという点でも重要な緑地といえます。



2018年

2017年に失敗したアカマツで再び営巣。特にトラブルなく2羽のヒナが巣立った。



2019年

2018年のアカマツで営巣するもカラスに巣を壊され、スダジイへ移転。その後は無事に2羽が巣立った。



2020年

続けてスダジイで営巣。4羽もヒナが生まれるも初期に1羽が死亡し、3羽が巣立った。



2021年

新しい巣を造るも放棄して元のスダジイ巣へ。他動物の襲撃があり、4羽中1羽のみが巣立った。



2022年

同じスダジイ巣で、例年より3週間ほど早く4つの卵を産んだ。初期に1羽が死亡し、4羽中3羽が巣立った。



2023年

3月29日から4月7日までに4つの卵を産んだ。何事もなければ、5月中旬までにはヒナが生まれる見込み。

オオタカの子育ても楽じゃない？



カラスとの戦い

カラスはオオタカの餌となる鳥類の一種ですが、同時に昔から繁殖の障害として知られていました。1対1ならともかく、集団で行動するカラスに狙われてしまうと追い払うことも難しいようです。自然教育園においても初期は度々繁殖の妨げになっています。



2017年6月

自然教育園で最初のヒナ。目撃証言から、この数日後、カラスによって捕食されたと見られる。



2019年3月

巣造り中の巣に襲来し、巣材を次々と持ち去った。幸い、繁殖自体は別の巣に移り、成功した。



2020年1月

巣を移った翌年も度々集団で飛来。1月から4月まで十数回来たが、上手く追い払っていた。

夜の襲撃者たち

オオタカの繁殖の妨げになるのは、日中のカラスだけではなく、夜に活動する動物たちもまれにオオタカの巣に襲来することがあります。2021年にはヒナが失われたこともありました。繁殖中の親鳥にとっては、夜もなかなか気が抜けません。



フクロウ

2020年4月夜にフクロウが飛来。この後、抱卵中のメスに攻撃し、追い払われた。



アオダイショウ

2021年5月の深夜にアオダイショウ、ハクビシンが続けざまにヒナのいる巣を襲撃。捕食まではされなかったが、攻防で傷ついたのか、翌朝に4羽中3羽が消失してしまった。



ハクビシン



ハクビシンの溜めフン



登りこみ防止のトタン板設置

トタン板



フンを払うオス

少量のフン

ハクビシンは繁殖の終わった時期の夜にもやってきて、巣をフンで埋めてしまうことも。職員らでフンの除去やハクビシンの伝う周りの低い枝の剪定、登りこみ防止の仕掛けなどを行ったところ、ハクビシンはほとんど来なくなった。少量のフンが残ったが、オオタカ自身が払ってそのまま巣を使った。

巣作り（求愛・造巣期）



1月に入ると、オスとメスの両方が見られ、巣作りが始まります。巣の近くで求愛行動や交尾もするようになり、この時期を「求愛・造巣期」と呼びます。

オオタカの巣は木の枝を組んで造られます。巣作りが進むと、マツやスダジイなど葉のついた枝（青葉）や木の皮（樹皮）を運ぶようになります。

青葉や樹皮は産座に敷き詰められ、卵やヒナを保護する役割とされます。

※ 産座：巣の中心で卵を産む場所

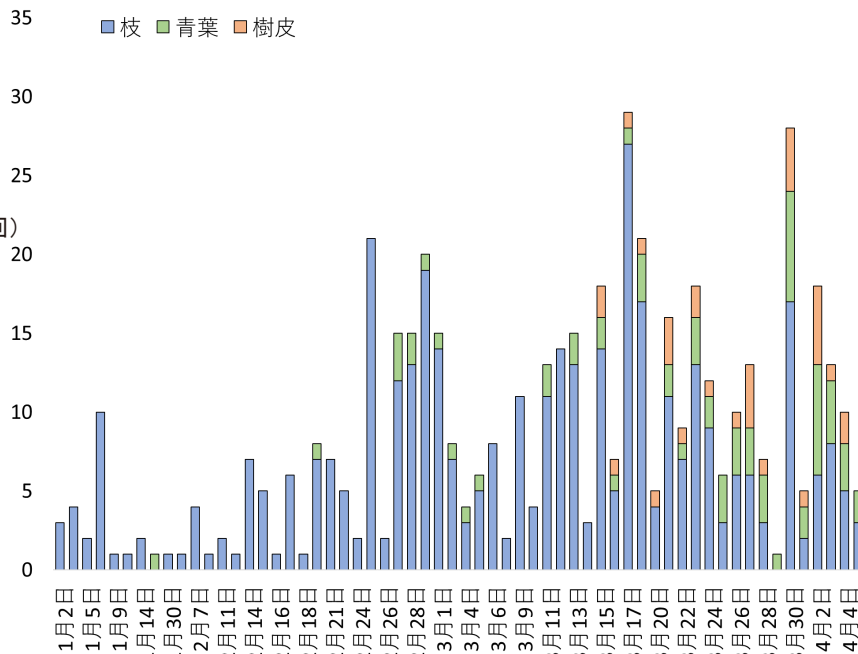


巣の移転等のなかった2020年では、1月1日から4月5日までに巣材が運び込まれたのはオス、メス合わせて504回でした。運搬回数の推移をみると、2月下旬から全体の回数と青葉の回数が増え、3月中旬から樹皮を運ぶようになったことがわかります。

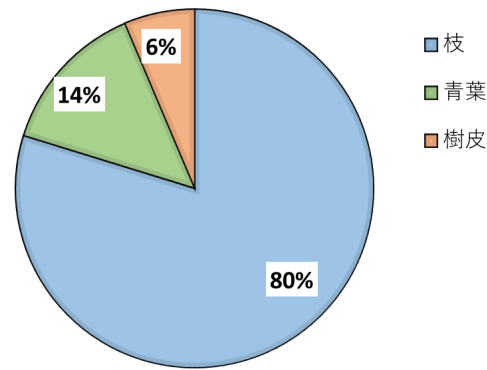
なお、巣が壊されてアカマツからスダジイに巣を移転した2019年、産卵するまで別の巣を使っていた2021年は巣材の運搬回数が顕著に少なくなっています。

巣材運搬の記録

総運搬回数：504



巣材別運搬回数の推移(2020年)



巣材運搬の内訳(2020年)

年	巣材運搬回数		
	1月	2月	3月
2019年※	7回	19回	1回
2020年	26回	126回	304回
2021年	41回	23回	7回

年毎の巣材運搬回数比較

※巣の破壊による移転前、アカマツ巣の記録

産卵と抱卵（抱卵期）



オオタカの産卵

通常、4月から5月にかけて最大で5卵まで産卵します。一度に産むのではなく、1卵ごとに数日の間隔があります。2022年、2023年は3月のうちに最初の産卵が行われており、特に2022年は一般的なオオタカの生態から見ても例外的に早い記録といえます。

各年の産卵日比較(一部推測含む)

年	産卵日			
	1卵目	2卵目	3卵目	4卵目
2020年	4月6日	4月9日	4月12日	4月15日
2021年	4月10日	4月14日	4月17日	4月21日
2022年	3月20日	3月24日	3月27日	3月29日
2023年	3月29日	4月1日	4月3日	4月7日



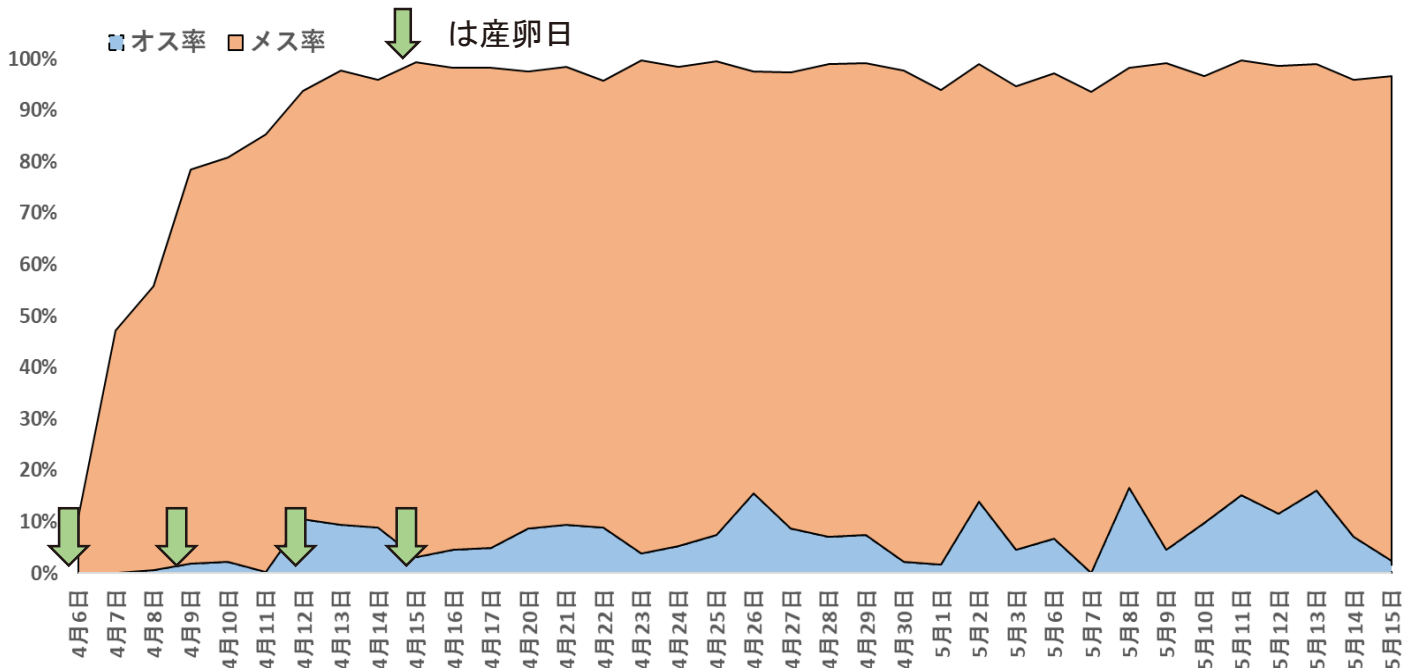
産卵後の巣内の様子

オオタカの抱卵

孵化するまではメスを中心に抱卵します(卵を抱いて温めること)。オスはメスの分の餌も狩りに行き、メスが餌を食べに離れた際には代わりにオスが抱卵することもあります。

2020年の日中の抱卵時間の割合(抱卵率)を見ると、1卵目の後は約50%で、2卵目の後(4月9日)は約80%、3卵目(4月12日)以降は約90%以上と産卵が進む度に抱卵率が高くなりました。

この傾向は他の事例でも見られ、それぞれの卵の孵化日が大きくずれないように、初めの方に産んだ卵の抱卵時間を少なくして調整していると考えられています。



抱卵期における日中抱卵率の推移(5時~18時, 2020年)

ヒナの誕生と成長（巣内育雛期）



1卵目の産卵から約40日後、最初のヒナが誕生します。ヒナは幼鳥となり、巣立てるようになるまでずっと巣の中で過ごします。

ヒナの誕生

園でヒナが初めて見られた日の間隔は、年によってまちまちですが、通常は1日ごとに生まれることが多いようです。2022年は1羽目と2羽目の間は1日、3羽目、4羽目は2、3日の間隔で生まれました。生まれたばかりのヒナは小さく、外敵に狙われやすい危険な時期です。生まれてから2週間ごろまではメスはほとんど巣内におり、ヒナを抱いて守ります。なお、2022年は1羽目か2羽目に生まれたヒナが3羽目が生まれる前に死亡してしまいました。原因は夜間に降った大雨により、衰弱してしまったことが考えられます。

年毎のヒナの初確認日の比較

年	1羽目	2羽目	3羽目	4羽目
2019年	5月25日	5月28日		
2020年	5月16日	5月17日	5月18日	5月19日
2021年	5月20日	5月20日	5月21日	5月24日
2022年	4月27日	4月28日	4月30日	5月2日



生まれた直後のヒナ

ヒナの成長（2022年）



ヒナの食事(巣内育雛期)



ヒナの食事の際、親は狩った獲物を巣に運ぶ前に別の場所で羽や頭などをむしり、ヒナが食べやすくしてから持ってきます。ヒナは成長するまでは自分で大きな餌を引き裂いて飲み込むことはできないため、親が餌を少しずつ口移しで食べさせます。

園内では生後3週間ほどから、時折、ヒナ自身で餌をついばむようになりますが、一つの餌を完全に自分の力で食べきるようになるのは巣立ち間近の時期です。(この時期も親に口移しを受けないわけではありません)。

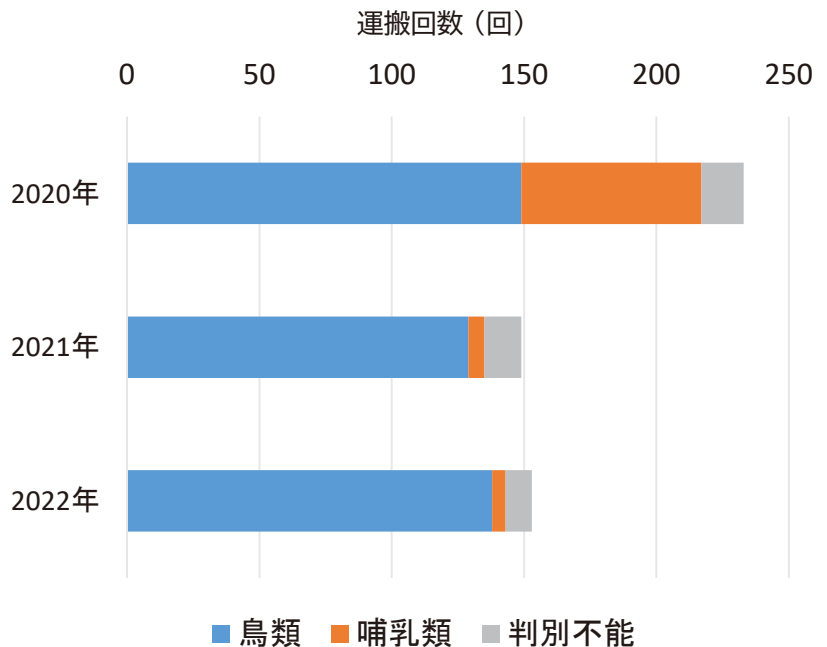


ネズミを運ぶメス

餌生物の内訳

2020年から2022年までの育雛期の記録では、自然教育園でヒナに与えている餌は大半が鳥類で、残りはネズミ類・モグラ類といった哺乳類でしたが、2020年のみ、哺乳類の割合が他の年より顕著に大きい結果となっています。2020年の初夏は、緊急事態宣言により都内の飲食店が休業した期間でした。この際に、本来夜行性のネズミ類が餌を求めて日中の住宅街に出てくる事例が確認されており、主に日中に狩りを行うオオタカにとって捕まえやすくなったのではと推測しています。

2022年からはカメラの位置を調整して、具体的な鳥の種類もある程度はわかってきました。現在までに確実に分かっている種は、カワラバト、ムクドリ、スズメの3種です。どれも市街地で普通にみられる種のため、園周辺の開けた緑地や公園などでも狩りを行っている可能性があります。



2020年-2022年における餌生物の運搬回数と内訳

巣立ちとその後（巣外育雛期）



誕生から約40日後、幼鳥（ヒナから成鳥までの中間）となったヒナが巣立ちします。この時期になると、体の大きさは親とほとんど変わりません。

オオタカの巣立ち

幼鳥になると、まず巣のかかっている木の枝にとまるようになり、その後、他の木の枝に飛び移るようになります。他の木の枝に飛び移った後は、徐々に遠くへ行くようになり、やがて巣には戻らなくなります。

巣立ち日についての定義は明確に決まっておらず、

- 巣から他の木の枝に飛び移った日
 - 一日の大部分を巣外で過ごすようになった日
- などが使われています。

幼鳥は1度に巣外に出始めるのではなく、最初の幼鳥が出た後、残った幼鳥が数日おきに出るようになります。幼鳥が2、3羽の場合は、全てが最初に巣外に出るまでは4、5日かかります。



巣から飛び立つ幼鳥



幼鳥の枝移り

巣立ち後の親子

巣立ちの後は、親子とも時折巣に戻ることはありますが、基本的には巣の外で生活します。

巣の外でもしばらくは親が面倒を見て、狩りのやり方などを教わりながら徐々に自立（独立）するようになります。

巣立ちから約1ヶ月後、独立した幼鳥は自分の縄張りを探しに旅立ちます。繁殖期が終わった後は親も巣には寄らなくなります。オスは行動範囲を大きく広げながらも時折繁殖した場所に戻ってきますが、メスは基本的に戻らず、別の場所で過ごします。

ただし、幼鳥の一部は繁殖した場所に留まり続けることもあるようです。園ではここ2、3年は9月以降、幼鳥1羽がオスの親とともに見られ、池で水浴びをする姿などがしばしば目撃されています。



オス（親）の水浴び



マツの枝にとまる幼鳥

企画展



2023
オオタカの子育て
自然教育園



2023.4.27_木 - 7.9_日

自然教育園で6年間確認されているオオタカの子育てについて、巣の上から撮影した映像や写真を使って紹介します。

会 期 2023年4月27日(木)～7月9日(日)
開園時間 9:00～16:30 (～4/30)、9:00～17:00 (5/1～) *入園は16:00まで
会期中休園日 毎週月曜日(ただし5/1は開園)
入園料 一般・大学生 320円
(高校生以下・65才以上・障害者の方とその介護者1名まで 無料)

お問合せ先 ☎ 03-3441-7176 東京都港区白金台5-21-5

*会期等は変更になることがあります。詳細はホームページ等でご確認ください。



自然教育園 HP

科博 自然教育園 (港区白金台)

本作は、2023年4月27日～7月9日の期間、
国立科学博物館附属自然教育園にて開催された
企画展「2023自然教育園オオタカの子育て」の展示パネル
をデータ化したものです